

# 物語における視線とマイクロ・マクロ・リンク —「語り論」の新展開—

野村 眞木夫

## 1. はじめに

2018年度表現学会全国大会シンポジウムは、「語り論」の新展開のテーマのもとに、栗原裕、西田隆政、福沢将樹の3氏をパネリストとして展開された。各パネリストの専門的な観点からこのテーマについて問題を提起すること、芥川龍之介「羅生門」を共通資料としてなんらか言及すること、この2点のみを前提とし、それ以外の条件は排除して、パネリストの発題に対する統一や制約は避けた。シンポジウム当日までにメール等による情報交換が行われ、各発題の原案に対する編集・運営委員会からの意見も共有した。各発題の展開は、研究史を確認して整理すること、これを前提としたパネリスト独自の主張を開示すること、日本語の古典と近現代作品、または英語圏の作品とその日本語訳を照らしあわせること、このような構成によって行われた。複数のテキストを対比的または類比的に取りあげることの有効性が認められる。

発題のキーワードとしては、「物語」「語り手」「narrative」「narrator」などテーマに直結するもののほか、「視点」「主観」「人物」「話法」「文」「文末」「草子地」「注釈」「style」「person」「speech」「subject」「subjectivity」などをあげることができる。質問用紙からは、さらに「人称」「(非)

意図的)「介入」「描写」「解説」が加えられる。

シンポジウムの議論を微視的に絞り込まなかったため、散漫な展開となったきらいがあり、進行上の不手際が少なくないが、未解決の問題や観点を再認識することができ、またアプローチの方法が多様であり得ることは明確にされた。

「語り論」は、森(2016)が指摘する「語り論の復興」という局面にあるとして、海外に目を転じて Alber and Fludernik eds. (2010) を参照すると、語り論(Narratology)で古典的だとみなされている Genette らの仕事に対し、それらの拡張と再配置、さらに認知科学、社会科学、これまで焦点化されてきた小説とは異なる、あるいはそれを横断するメディアに着目することが提案されている。この動向には慎重な検討を要し、特に多様なメディアへの言及は、他日を期すことにする。

本稿では、シンポジウムの発題と議論、質問用紙の記述を参照しながら、「語り論」の展開する方向性をさぐる。

## 2. 「羅生門」からの問題提起

芥川龍之介「羅生門」は、しばしば語りの観点から取りあげられ、改稿が行われた箇所への言及も少なくない。初出と改稿との校合は、『芥川龍之介全集』第一巻

1982岩波書店の後記に掲載されている。物語の設定された時代、京都の「地震」「饑饉」など環境的な要因や、羅生門周辺に関わるマクロのレベルの情報の表現には、改稿の跡が認められない。改稿は、下人と老婆の言動を中核とするマイクロのレベルにおいて行われている。

本稿では、作品後半に見える、老婆の述懐の表現に関わる改稿に着目する。(1)は1915年の初稿に基づく『羅生門』1917阿蘭陀書房(ほるぷ出版復刻)、(2)は改稿された『鼻』1918春陽堂(『芥川龍之介全集』第一巻1982岩波書店)に従う。「老婆は、片手に、まだ屍骸の頭から奪った長い抜け毛を持つたなり、墓のつぶやくやうな声で、口ごもりながら、こんな事を云つた」に続く老婆の述懐の表現の後半5文を引用してある。(1)はかぎ括弧のない地の文として記述され、(2)の述懐の部分はかぎ括弧でくくられている。(2)は、老婆と女の関係を老婆自身が語り手として語る文脈である。引用は新字体による。

(1) ①自分は、この女のした事が悪いとは思はない。②しなれば、饑死をするので、仕方がなくした事だからである。③だから、又今、自分のしてみた事も悪い事とは思はない。④これもやはりしなれば、饑死をするので、仕方がなくする事だからである。⑤さうして、その仕方がない事を、よく知つてみたこの女は、自分のする事を許してくれるのにちがひないと思ふからである。(復刻版: 14f)

(2) ①わしは、この女のした事が悪いとは思うてぬ。②せねば、饑死をする

のぢやて、仕方がなくした事である。③されば、今又、わしのしてみた事も悪い事とは思はぬぞよ。④これとてもやはりせねば、饑死をするぢやて、仕方がなくする事ぢやわいの。⑤ぢやて、その仕方がない事を、よく知つてみたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるであろ。

(全集第一巻: 134)

この部分については、片村(1988)、田中(1996)、三谷(1996)たちが取りあげている。彼らは、観点の相違はあるとしても、視点や話法の問題として理解をはかる。田中と三谷は自由間接話法(言説)にも関係づける。松本(2006)は、田中・三谷の論点を、エーコ(1996)による、作者・語り手・登場人物・読者の入れ子モデルによる多層性に結びつける。エーコのモデルは、perspectiveの範疇からとらえなおすとNünning(2001)の提案するモデル(詳細は野村(2013)を参照)に一般化できる<sup>1)</sup>。語り手や人物の主観的な世界観に着目し、読み手がどのperspectiveをとる可能性があるか、いかにして物語全体を有意味にするかを問うのである。

(1)に使用されている非再帰的な「自分」は、野村(2000: 251)でいう「描出表現」<sup>2)</sup>の標識の一つである。狭義の人称性は、問われない(廣瀬1988)。Kuroda(1973)は、これを非報告文体の主要な標識としている。(1)の「思ふ」の使用もこれと矛盾しない(野村2000: 279)。しかし、(1)(2)とも引用部に「老婆は、大体こんな意味の事を云つた」が後続することは、語り手が老婆の述懐を選択的に編

集していることを意味する。(2)における口頭語の使用は、老婆の人物像としての特性を限定する、いわゆる役割語としての機能<sup>3)</sup>が中核をしめる。

これらの所見から、(1)(2)の改稿は、話法や引用の問題に回収するのではなく、*perspective*の問題を重視し、語りの方  
法としてどのような表現が選択されているかに注目することに生産性が認められる。

先にマクロのレベルでの改稿が認められないことを指摘した。引用部分では「饑饉」に結びつく「餓死をする」という語句にも手が加えられていない。これは語り手による認知の方法の痕跡である。この二三年の京都における「饑饉」の記述はマクロのレベルに属する。これに対し、「饑饉」の結果としての「餓死」は、老婆の述懐で言及されるとともに、たとえば引用部に後続する下人の発話「己もさうしなければ餓死をする体なのだ」などでも同様に言及される。この「餓死」は、女、老婆、下人が共有する事象であり、個々のマイクロのレベルに属する。これは、三者が等しくマクロのレベルの事象に規制されており、それが三者の行動規範を生成することを語る。すなわち、マイクロ・マクロ・リンクである。これは語りの過程で組織化されるのであり、語彙的な結束性や一貫性による観察では説明がゆきわたらない。

次に、文末表現では、(1) ②④⑤の「……からである」の使用による理由説明の客体化された分析的な意味の明示が(2)で除去され、「である」「ぢやわいの」による主体的なモダリティの表現に縮減される(cf. 蓼沼2008)。特に(2) ②⑤で

は確言が概言に変換されている。この意味では、老婆が自身と女の関係を語る過程において、(2)の表現では両者の認識的な距離(*distance*)が拡大されていると理解できる。

(2) ①における「ておぬ」の使用は、発話の時点で思考活動の継続していることの自覚を意味する。(2) ③「ぞよ」の使用には、聞き手すなわち下人への指向性が認められる。(2) ⑤で付加された推測の叙法副詞「大方」は、工藤(1982)の用語を借用すると老婆の現実認識を明示している。(2)において、これらアスペクトやモダリティの要素は、老婆の女に対する距離を拡大し、また老婆の役割語が表層的に採用されたことは、テキストの語り手と老婆との距離を縮小することに機能する。

物語における距離の概念は、本稿では次のように定義する。

(3) 距離とは、語り手がある作中人物または表現対象に対して想定する、あるいは語り手が複数の作中人物または表現対象の間に想定する認識的または認識的な位置関係である。

(1)(2)について指摘した要素は、語り手が読み手に対し、あるいは語り手としての老婆が受け手の下人、自己の語る物語に参加する女に対して、相互を認知する位置関係の標識とみなすことができる。日本語において、話法や引用の方法、またはその区分との相関の問題になじむ要因ではない。

距離の概念は多様に扱われており、物語論と文体論で、Genette(1980)、Prince

(1982)、Leech and Short(1981)たちは、perspectiveとともに物語的情報を調整すること、語られる事象と語り手・作中人物・受け手の関係、英語の話法の識別などに関連づける。認知言語学の観点から、Nikiforidou (2012) は視点と関連させながら有標・無標の関係を距離的な遠近に結びつけ、Dancygier (2012) は語りの位置と現実の世界との距離を扱う。社会記号論のKress (2010) は、社会的または感情的な距離を仮定し、powerの関係とsolidarityの関係を指摘する。

視点やperspectiveとの関連で距離を検討する立場を選ぶと、糸井(2009)が採用した「視線」の概念をその上位に設定することができる。視線は、次のように定義される。

(4) 視線とは、まなざしで、主体の、認知する対象(ものやこと)に対する、主観的な思いである。もって臨む思いもあり、また、対象に接して引き起こされる思いもある。時には、対象に対する評価的判断ともなる。事実認知における、心の作用面を言う。

(糸井2009: 65)

視線は、「視座」(認知主体である語り手が事態を認知し表現する位置)と「被視点」(見られる対象(ものやこと))の二つと組み合わせられている。従来の視点論は、これらを包括的に扱ってきた。本稿では、視線の属性の一つとして、上記の距離の概念を組みこむものと仮定する。主体としての語り手が、主体としての人物や対象を認知し言及する事態にも、この概念を適用する。つまり、物語におけ

る語り手と人物や対象の間、あるいは物語における人物や対象相互の間に距離が想定され、視線に組みこまれるのである。

以上、「羅生門」の改稿部分を素材として、(5)を仮定した。

- (5) a. 語りの過程において、マイクロとマクロのレベルが結びついた、マイクロ・マクロ・リンクの現象が見いだされる。
- b. 語り手の視線において、距離の操作が認められる。

### 3. 語りにおける視線と表現類型

本節では、(5)の仮定のもとで、人称の選択と語りの方角の選択がどのように関係するかを観察する。人称の観点から小説を類型化すれば、1人称・2人称・3人称小説が想定され、一編の作品でそれらが組み合わせられたものも認められる。語り手には、無人称も想定することができる(野村2014、2016)。

観察の対象には森敦の短編小説<sup>4)</sup>を選び、庄内を舞台とし、類似する状況や人物、出来事を共有して、相互に矛盾の少ない部分を例とする。本稿では「月山」「杳右エ門の木小屋」「門脇守之助の生涯」の3作品を参照する。引用は『森敦全集』第三巻(筑摩書房)による<sup>5)</sup>。各作品に共通性は見いだされるが、それぞれ独立して発表されている。作品間の差異は、改稿とみなしうる水準ではない。「門脇守之助の生涯」が3人称小説で語り手は無人称、他は1人称小説である。

#### 3.1 語りにおける視線

まず、視線の観点から、その標識を想

定しながら、3人称小説と1人称小説の語りかたの異同を検討する。

(6) ①そうだ、だれが来てもいいと思ううち、だれぞが来るということすら忘れるようになった。②いや、その忘れようとするころあの人<sup>あの人</sup>は来たが、まだ若いようで格別な様といわれるような人には見えなかった。③ちょっと断わって自分から庫裡の部屋部屋を見て回り、階下は暗い。④明かるい二階にいさせてくれと言う。⑤むろん、守のじさまは自分が独り言を、言わずにいられなくなっていることを知っていた。⑥もし二階にいてくれるというなら、遠慮なく独り言を言うことも出来る。⑦ただ、あの人<sup>あの人</sup>が来てから幾月も立たぬうち、いつとなく七五三掛のじさまやばさまがぼつぼつと来るようになり、時には笑い声が聞こえることもあった。⑧また、そんなじさまやばさまは囲炉裏端の守のじさまにも立ち寄ってくれるばかりか、あの人<sup>あの人</sup>と食うてくれ。⑨そう言って餅を掲げば餅を、馳走を作れば馳走を持って来た。⑩いや、芋茎<sup>ずいき</sup>で栓をした徳利さえ提げて来た。(門脇: 562f)

(7) ①「まんず、お前さまも階下<sup>した</sup>さ移るんだちゃ。いつまでもあげだとかさいて、病みでもするこったば、あるのはたんだ富山の薬で、どうしようもねえさけの」

②そう言う寺のじさまは、みずからがすでに中気を病み、声を上げねば足も運べないのです。③庫裡の階下には広い廊下を挟んで、ともかくも襖、障子のある部屋らしいものが幾つも並ん

でいました。④もとは二階もそうなっていたのでしょう。⑤しかし、いまはただ中央と両側の腰高の窓にそった廊下や敷居、鴨居を残すだけで、天井もなく、棟木も梁もまる見えの百畳ほどの広間になってい、わたしはそのいちばん奥の、境内を見晴らす片隅に寝起きしていたのです。⑥来たころはまだ暑いと言っていいほどの日もあり、心地よくさえあったのですが、雨になり、みぞれになり、氷雨になる。⑦階下から襖を持って上がり、障子を持って上がりして、八畳ほどの広さに囲ってはいたものの、上はガラ空きです。

(月山: 29)

語り手は、(6)が無人称、(7)が1人称である。(6)では「あの人」、(7)では「わたし」が、七五三掛の注連寺を訪れ、寺守である「守のじさま」あるいは「寺のじさま」の世話になりつつ、寺の二階で暮らす過程の表現である。(6)⑦で言及される「七五三掛のじさまやばさま」は、(7)の局面では言及されない。(6)にあっても、「あの人」のように個別に言及されず、集団として周道的に位置づけられるにとどまる。

「てくれる」は、3人称小説の(6)で回復されるが、1人称小説の(7)には認められない。(6)の述語動詞には、思考・心理・知覚の内的な活動に関するものがある。(7)ではこの種の動詞は欠け、外的な動作・作用に関するものが主である。「来る」は、(6)①②⑦、(7)⑥に用いられていて、視座が注連寺の側におかれていることが理解される。

(6)において、「あの人」は移動する主

体ではあるが、先にあげた①「思う」④「忘れる」②「見える」⑤「知る」⑦「聞こえる」などの思考・心理活動・内的知覚に関わる活動をする主体は「守のじさま」である。これに対し、「あの人」「七五三掛のじさまやばさま」たちは、そのような活動に参与しない。「来る」や「言う」の動作主であるとしても、中心となる視座からは周辺的な距離で位置づけられている。この意味において、視線の主体は守のじさまに帰属するとみなされる。無人称の語り手は、守のじさまの視線にそって事象を認知し、「あの人」に対する評価的判断も、守のじさまの価値観を採用して語るのである。語り手の視線とじさまの視線との合成が生じていると考えられる。

このことは「てくれる」の使用についても類比的な理解をもたらす。(6)④「いさせてくれ」と⑥「いてくれる」には、「あの人」と守のじさまの間で相互的な受益の関係が認知されていると理解される。⑧「立ち寄ってくれる」の恩恵の認知主体は、守のじさまである。引用句内の依頼表現⑧「食うてくれ」では、受け手の守のじさま側に実質的な利益が認められる。「くれる」による受益の意味は物的な授受の有無にかかわらず、物語の人物間に想定され、すぐれて語りにおける視線の方向性を規定するものである (cf. 山田2004、澤田2007)。

(7)の1人称者は、語り手として機能すると同時に、この引用部分では、寺のじさまや庫裡に対する観察者としての属性が中核をなす。ここに認知主体としての視座があり、視線が想定される。じさまはこの作品では中核的な認知主体の属性を持たず、観察の対象として、または

相互的な関係性のなかでのみ認知主体の役割をはたす。

### 3.2 語りにおける発話・思考および注釈的な表現

次に、物語における人物の発話・思考の語りかた、および注釈的な表現に着目し、その類型性を考える。

(8) ①「おや、お前さんでも宿かりするところがないのかい。みんな守のじさまと呼んで、ここに宿かりさせてくれるじゃないか」

②「そりゃア、ここだからだ。兄だ入みてえな人でも、ここを離れば宿かりするところがうなった。だども、兄だ人は橋を架けた。あげだふうに果てはしたんども、いまも他人様のお役に立っとるんでろ」

③しかし、おれは橋架けんんだ、橋架けんんだと割り箸を割ったとて、だれ様のお役に立つのか。④守のじさまはときに空しい思いをしながらも、割り箸を割りつづけた。⑤そうでもしなければ、生きていられないような気がしたのである。⑥その上、冬場が来て吹きが吹きはじめると、不自由な足にカンジキをはき、一と足一と足に「こわちゃ(辛い)、こわちゃ」と声を上げながら境内に雪路をつくったが、そのぶん、割る割り箸の数を減らすようなことはなかった。⑦一步を欠いても着くところまで着けねえ。⑧ちょっと手を抜いても橋は落ちるのだ。

(門脇: 554)

(9) ①「春になったからってそんな綺麗なもんねえ。雪が解けると、道

の端には野糞が落ちとる。紙が散つとる。ンだども、雪は上から解ける。下から解ける。昼も夜もザワザワと音立てて、どこもここもさわになんなどて。奇麗になるのは、それからだ……」

と、[引用者注：杵右エ門の]じさまが言うのを聞くうちに、わたしはハッとあの「よいしょ」「よいしょ」と言う声は、耳に残っていた寺のじさまの声だということに気がつきました。②わたしはいつもその声で目を覚ますのです。③寺がどんなになつたとしても、道を作らずにはいられるものでねえと言い、朝一番に寺のじさまは足を引きずって雪を踏んでいるのです。④道が変われば世界が変わるといふ。⑤してみれば、寺のじさまもただ地炉端で割り箸を割っているのではない。⑥あれも重い荷を背負って、どこか分からぬがどうしても行かねばならぬところに、みなと必死になって行こうとしているのだ。(木小屋：541)

「守のじさま・寺のじさま」の兄は、集落付近の川に橋を架ける働きをしたが、博打のために自死をした。守のじさま・寺のじさまは、他所で大工を務めた後、養老院を経て故郷の寺守となり、割り箸を割りながら暮らしている。この経緯が引用部分の背景にある。(8)(9)に共通するのは、じさまが割り箸を割っていることと、境内に雪路をつくるときの「こわちゃ」または「よいしょ」という声の記述とである。

(8)①②は、守のじさまの妻とじさまの発話である。括弧内では地域語(cf. 山本2014)またはイディオレクトが用いら

れ、役割語として機能する。その直後に、かぎ括弧を使用しない③が続く。この文は1人称で語られ、②と類比的な役割語が使用される。自由直接発話または自由直接思考(野村2000: 252)とみなすのが自然だろう。④にある「空しい思い」が③を指示すると理解するのであれば、③は自由直接思考と判定されよう。④では3人称に変換され、行為のみならず、思考の表現が共起していることから、守のじさまの描出表現として理解可能であり、「気がした」で叙述される⑤も類例である。ただし、「のである」は、じさまの自己言及による説明、または語り手がじさまの認識を注釈的に説明したことの標識として機能する。後者において、語り手とじさまの距離は極大化される。⑥は、無人称の語り手がじさまを客体化した観察的な描写か、描出表現かあいまいである。描出表現だとすれば、じさまの自己観察の表現である。⑦は文末の融合母音の使用により自由直接表現と認められる。⑧は総称表現であり、このことから描出表現の可能性が高いが(野村2000: 305f)、口頭語の使用が判然としないため、描出表現か自由直接表現か、確定できない。注釈的な説明として理解することも可能である。注釈的な説明として理解すると、その認知主体は語り手が中核をしめるが、総称表現のばあい、作中人物と認識を共有しうるので、ここでも視線の合点が認められる。

このように(8)の語りかたは、あいまいさを内在しながら多様に推移し、語り手と守のじさまとの間に想定される視線の距離は、固定されない。ただし、地の文における役割語の使用・不使用は、両者

の距離の判定に機能する。

(9)は、「わたし」が「杵右エ門のじさま」に連れられて吹雪の中を「杵右エ門の木小屋」まで行く過程の一場面である。①は杵右エ門のじさまの発話、④は先行文脈での杵右エ門のじさまの発話の引用である。ともに「わたし」の認識を成立させる参照点として機能する。

「よいしょ」は、先行文脈では、「その一と足一と足に、「よいしょ」「よいしょ」と微かな唸りを上げている」(木小屋:540)のように杵右エ門のじさまの声とされている。これは、①後半の地の文で寺のじさまの声に写像される。このことから、表現される事態を認知する語り手の視線は、(8)にも記述されている守のじさまにおける割り箸を割ることと橋を架けることの視線に、(9)②以下で変換されていく。(9)⑤⑥は、「のだ」の表現類型で、語り手の理解を経た説明の表現である。

(9)で沢を登るなどして「わたし」が「景色見」によって得た景観の情報は、マクロのレベルに属する。3人称小説の「門脇」では、これと類比的な情報が「あの人」から七五三掛のじさまやばさまに伝えられ、さらに守のじさまに通達されるように構成される。その語りにおいて、マクロのレベルの情報はマイクロのレベルに結びつけられる。(10)がその例である。①～③は、七五三掛のじさまたちが「あの人」の語った話に言及しながら、守のじさまと展開する談話である。

(10)①「言われてみれば、七五三掛にはわがとこさ水を引く独<sup>とつこのやま</sup>鉦山がある。その中腹に<sup>じゆうおう</sup>連注寺があって、そこさ<sup>とうげ</sup>十王峠から下りて来んなださけの」

②「それはそうなんだども、おらたちは一歩下りればその一歩で、尾根尾根が寄せて来て、景色がガラリと変わるなんてこと、思うたことがあんでろか」  
③「ねえのう。おらは七五三掛に生まれて、育ったんどもの」

④守のじさまもいつか折れて来てそう相槌を打ちながら、いまさらのようにそんな景色の中にいたことを、忘れていたのに気がついた。(門脇:564)

①にある七五三掛・独鉦山・十王峠が地理的な名称、また②の尾根や景色は抽象的だがやはり地理的な情報であり、これらは環境の要素であるマクロのレベルへの言及である。③は守のじさまの相槌的な発話とされ、七五三掛にも言及しながら、それを自己の生育環境として位置づける。すなわち、マクロの情報をマイクロのレベルに結びつけるのである。④前半の副詞節は、③を発話する主体の観察可能な情報だが、後半はマクロの景色の認識に結びつく心的活動の描出である。ここでも描出表現の主体は守のじさまのみで、他のじさまたちはその主体とされていない。このように、語り手と人物の距離は、直接引用の発話の使用にあっては、守のじさまと他のじさまとの間に差異は認められない。しかし、この作品で、自由直接表現と描出表現の使用は守のじさまに限定されている。語り手は、引用の標識を介在させることなく、守のじさまの発話または思考を地の文に直接記述できる語りの関係を選択している。この意味において、語り手と守のじさまとの距離は、他の人物に比し、より近接していると仮定できる。

#### 4. まとめ

- (a) 環境・地理・社会的な要因をマクロのレベル、個人・小集団の要因をマイクロのレベルと仮定すると、語りの過程においてマイクロ・マクロ・リンクの現象が見いだされる。
- (b) 視線・視座の概念を導入することで、語りにおける視点の理論をより緻密に記述することができる。
- (c) 視線の概念において、語り手と対象または作中人物、あるいは対象または作中人物相互の間に認識的または認知的な位置関係に応じた距離の概念を導入することが可能であり、表現形式に応じて距離が仮定される。
- (d) 物語の展開において語り手や作中人物に認知主体としての属性を割り当て、物語の人称空間を相対化することができる。

#### 【注】

- 1) Pier (2011) は、フランス語圏における物語論の状況を展望し、Nünningの方法などがフランス語圏には根付いていないことを指摘、Adam, J-M. の仕事を評価し、黒田成幸、Hamburger、Banfieldたちの業績には批判的に言及する。
- 2) 描出表現とは、「と」などによる明示的な引用の標識が欠けているか、その作用範囲のそとで、コミュニケーションの参加者と区別されるテキストの任意の参加者の発話や思考の内容を対象とし、コミュニケーションの参加者のたちばからテキストの参加者をさししめすモードで表現する類型である。なお、自由直接表現とは、テキストの参加者の発話・思考の対象を彼自身のたちばからのモードで表現する類型である。
- 3) 下人の発話は、かぎ括弧を用いた引用形式により、初出以後、若干の改稿が認められる。役割語使用の面から、下人と老婆は差異化されている。
- 4) 森の長編小説『われ逝くもののごとく』について、中村 (2017) がある。
- 5) 引用に際し、次の作品名は略称による。「杳右エ門の木小屋」(「木小屋」)、「門脇守之助の生涯」(「門脇」)。

#### 【文献】

- Alber, J. and Fludernik, M. eds. (2010) *Postclassical Narratology: Approaches and Analyses*. The Ohio State University Press.
- Dancygier, B. (2012) *The Language of Stories: A Cognitive Approach*. Cambridge University Press.
- エーコ, U. (1996)『エーコの文学講義』(和田忠彦訳) 岩波書店 [原著 1994]
- Genette, G. (1980) *Narrative Discourse: An Essay in Method* [1972]. tr. by Lewin, J. E. Cornell University Press.
- 廣瀬幸生 (1988)「私的表現と公的表現」『文藝言語研究・言語篇』14: 37-56.
- 糸井通浩 (2009)「表現の視点・主体」糸井・半沢編『日本語表現学を学ぶ人のために』世界思想社: 64-83.
- 片村恒雄 (1988)「『羅生門』の改稿部分についての表現研究」『表現研究』47: 9-16.
- Kress, G. (2010) *Multimodality: A social semiotic approach to contemporary communication*. Routledge.

- 工藤浩(1982)「叙法副詞の意味と機能—その記述方法を求めて—」『研究報告集』3国立国語研究所: 45-92.
- Kuroda, S. -Y. (1973) “Where epistemology, style and grammar meet.” in Anderson, S. R. et al. eds. *A Festschrift for Morris Halle*, 377-391. Holt.
- Leech, G. N. and Short, M. H. (1981) *Style in Fiction*. Longman.
- 松本修(2006)『文学の読みと交流のナラトロジー』東洋館出版社
- 三谷邦明(1996)「『羅生門』の言説分析—方法としての自由間接言説あるいは意味の重層性と悖徳者の行方—」『近代小説の〈語り〉と〈言説〉』有精堂
- 森雄一(2016)「文章・文体(理論・現代)」『日本語の研究』12(3): 85-90.
- 中村三春(2017)「方法としてのくわたし」: 森敦『われ逝くものごとく』における語りの位相』『北海道大学文学研究科紀要』152: 113-144.
- Nikiforidou, K. (2012) “The Constructional Underpinnings of Viewpoint Blends.” in Dancygier, B. et al. eds. *Viewpoint in Language: A Multimodal Perspective*, 177-197. Cambridge University Press.
- 野村眞木夫(2000)『日本語のテキスト—関係・効果・様相—』ひつじ書房
- 野村眞木夫(2013)「今井文男表現学の位置—表現研究のあらたな可能性をもとめて—」『表現研究』98: 2-11.
- 野村眞木夫(2014)『スタイルとしての人称—現代小説の人称空間—』おうふう
- 野村眞木夫(2016)「日本語のテキストにおける名詞の階層と参加者の中心性」『上越教育大学研究紀要』35: 181-194.
- Nünning, A. (2001) “On the Perspective Structure of Narrative Texts .” in Peer, W. van et al. eds. *New Perspectives on Narrative Perspective*, 207-223. State University of New York Press.
- Pier, J. (2011) “Is There a French Postclassical Narratology?” in Olson, G. ed. *Current Trends in Narratology*, 336-367. de Gruyter.
- Prince, G. (1982) *Narratology: The form and functioning of narrative*. Mouton.
- 澤田淳(2007)「日本語の授受構文が表す恩恵性の本質—「てくれる」構文の受益者を中心として—」『日本語文法』7(2): 83-100.
- 蓼沼正美(2008)「物語り／伝承／「下人の行方は、誰も知らない」」『日本文学』57(4): 66-69.
- 田中実(1996)『小説の力—新しい作品論のために』大修館書店
- 山田敏弘(2004)『日本語のベネファクティブ』明治書院
- 山本美紀(2014)「森敦「月山」論—言語空間の中の方言—」『解釈』60(1, 2): 43-50.

#### 【付記】

本稿は2018年6月2日に行われた第55回表現学会全国大会(同志社大学)シンポジウム「語り論」の新展開」における各パネリストの発表内容、質問用紙、会場での議論を参考に、司会を承った筆者の考えるところをまとめたものである。会場のかたがたに謝意を表します。

(上越教育大学名誉教授)